

過疎高齢化が進む小規模集落における支え合いの可能性

－ 3 地域の比較研究－

○ 皇學館大学 大井 智香子 (3957)

小松 理佐子 (日本福祉大学・2113)、高野 和良 (九州大学大学院・2023)、

キーワード：過疎地・支え合い・まちづくり

1. 研究目的

本研究は、過疎高齢化が進む地域における支え合いの実態と住民の意識を明らかにすることを目的とする。本報告は、平成 27-30 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B)「地域福祉専門職による過疎地域支援のための診断指標の開発－関係性の分析－」(課題番号 15H03442) 研究代表者：大井智香子 (皇學館大学) の成果の一部である。

2. 研究の視点および方法

平成の大合併によって再編された広域の自治体 A 市において質問紙調査を実施した。対象は、市内 3 か所のまちづくり協議会エリアに在住する住民である。選定したエリアは、A 市内 10 地域のなかで最も人口が少なく高齢化が進んでおり合併後の人口減少が最も激しい B 地域と 2 番目に人口が少なく高齢化率も 2 場目で合併後に人口減少が最も少ない C 地域 (この 2 地域は合併前の B 村、C 村に該当する)、中心市街地の D (小学校区であって行政区の D 町とは異なるエリア) の 3 か所とした。B、C、D それぞれの面積は大きく異なっている。過疎高齢化が進む B、C と市街地 D を比較検討することで、過疎地域における生活の実態、支え合いの現状、現在や将来に対する住民の意識等を明らかにすることができるのではないかと考えた。

質問紙調査は、配布・回収ともに郵送による留置き式、調査期間は 2018 (平成 30) 年 2 月 15 日～3 月 9 日、対象者の選定は選挙人名簿より 20 歳～90 歳の 1,100 人を無作為抽出実施した。回収数は 602、そのうち有効回答が 599、無効回答が 3 通、有効回収率 54.5%であった。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会 研究倫理指針に従って行った。質問紙調査実施にあたり九州大学大学院人間環境学研究院共生社会学講座・九州大学大学院人間環境学府共生社会学コース研究倫理委員会による倫理審査承認を得て実施した。調査対象者へは、研究目的、調査・分析方法、回答の取扱いと責任の所在を説明し、回答が難しい場合や答えたくない場合には回答しなくても問題ないことを伝え、結果の公表について了承を得ている。発表にあたりプライバシー保護に留意し個人が特定できないよう配慮している。

4. 研究結果

調査対象とした地域の概要(人口のデータ)と調査票の配布・回収数は次のとおりである。

	人口 2017(平成 29)年 10 月 1 日現在			医療機関
	総数	65 歳以上	高齢化率	
A 市全体	89,328 人	28,156 人	31.5%	
B	340 人	188 人	55.3%	診療所(週 2 回巡回)
C	1,116 人	456 人	40.9%	診療所(常設)
D	1,532 人			圏域の基幹総合病院

B、C ともに、A 市市街地からの公共交通機関は路線バスである。市街地までの所要時間は、B 中心地(支所前)からはコミュニティバスと路線バスを乗り継いで約 60 分、C 中心地(支所前)からはコミュニティバスと路線バスを 2 度乗り継いで約 90 分、それぞれ周辺部からは加えて 30 分程度かかり、バス路線からさらに離れた集落も複数存在する。日用品や食料品の買い物はいずれの地区も「A 市内」が最も多く、B: 81.0%、C: 78.9%、D: 75.2%、病院への通院も同じく「A 市内」が最も多く、B: 68.1%、C: 65.1%、D: 85.5%という結果であった。

このほかにも B、C には共通する生活習慣や意識などが見受けられるのだが、老後に対する考え方に大きな差が見られた。不安を感じないと回答した人にその理由を尋ねた設問(複数回答)では、「不安を感じない理由」のトップは B.C.D ともに「家族がいるため」であるが、「まちづくり協議会があるため」が B: 15.6%、C: 3.7%、D: 5.9%と、大きな差がみられ、B と C が大きく異なる結果となった。この理由として考えられることは、B で運営されている自宅と行き来しながら冬季に共同生活をおくる高齢者ファミリーホームの存在である。

5. 考察

人口の減少と高齢化の速さ、A 市の市街地や行政機関からの距離などを考慮すると B、C の生活はかなりの困難を極め不安を感じていることが予想された。調査結果からは、もちろん不安を読み取ることもできるが B の住民が不安だけでなく、地元で暮らし続けることに信頼と希望を見出しているということが明らかとなった。その要因としては、高齢者ファミリーホームの存在とそのあり方をめぐってこれまで重ねられてきた葛藤や話し合いが生み出した住民相互の支え合い、まちづくり協議会のあり方の B,C,D それぞれの違い、高齢者ファミリーホームの運営に適切に介入してきた社会福祉協議会職員の存在が考えられる。これらについてはさらに考察を深めていきたい。